

# 平成17年度の漁況

佐々木 正・曾田一志・向井哲也

## 1. まき網漁業

### (1) 漁獲量の経年変化

図1に1960年(昭和35年)以降の島根県の中型まき網漁業による漁獲量の経年変化を示す。

2005年の漁獲量は約5万8千トンで、前年の86%、平年(過去5ヶ年平均)の93%となった。浮魚類の漁獲量は、近年では、マアジ、ブリ等の好漁により2年連続して増加傾向にあったものの、2005年は漁獲の主体であるマアジの漁獲量が前年を3割近くも下回ったことや、2003年、2004年と好調であったブリ類の漁獲量が減少したことの影響により、前年、平年を下回る結果となった。

2005年のCPUE(1ヶ統1航海当り漁獲量)も、マアジ漁獲量の減少により、26.7トンとなり前年の93%となった。

### (2) 漁労体数の動向

中型まき網漁業の漁労体数は、1969年には78ヶ統あったものが、徐々に減少している。この原因としては、対象魚種の変化や漁労技術の発達、漁船の大型化などが考えられるが、1990年代以降は、マイワシ資源の減少に伴う経営の悪化が最大の要因であった。さらに、2000年以降は減船事業の導入もあり漁労体数が急減した。

2005年の漁労体数は15ヶ統で前年と同数であった。

### (3) 魚種別漁獲状況

図3～7に島根県の中型まき網による魚種別月別漁獲動向を示した。

#### ①マアジ

2005年の総漁獲量は約2万8千トンで、前年の71%、平年の101%となった。

5、6月に2004年級群(1歳魚)を主

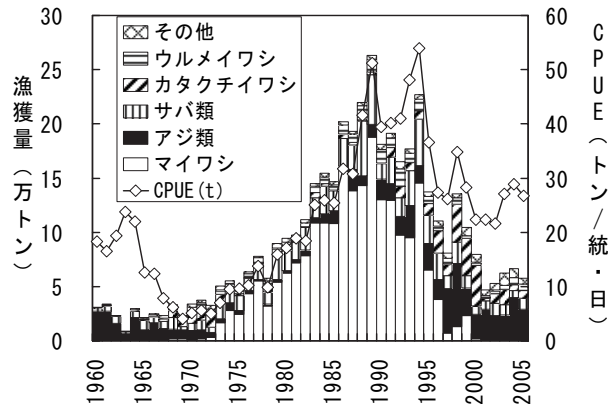


図1 島根県の中型まき網による魚種別漁獲量とCPUEの推移  
(2002年までは農林統計値、2003年以降は漁獲システム集計値)

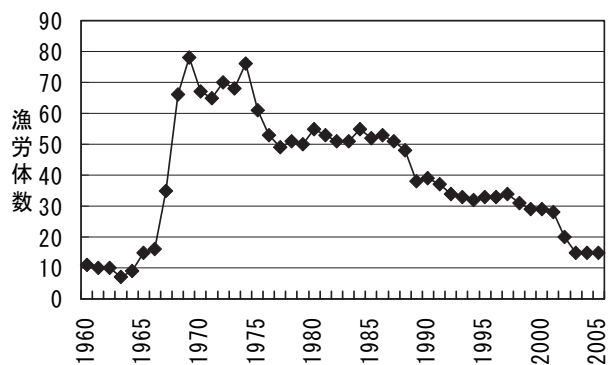


図2 島根県の中型まき網漁労体数の推移

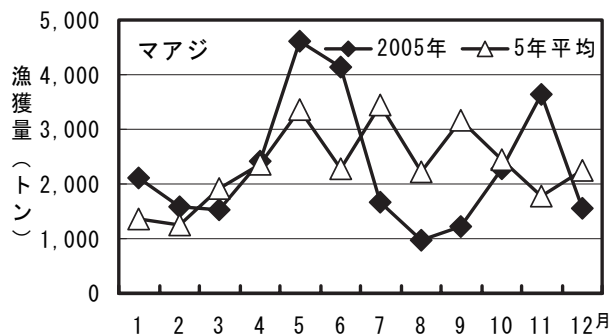


図3 中型まき網によるマアジの漁獲量

体にまとまった漁獲があったものの、夏季には平年の半分程度まで減少し、その後、10月以降県東部を中心に再び増加したが、11月後半からは記録的な時化の影響で操業日数が減少し、漁獲量も急減した。

②サバ類

2005年の総漁獲量は10,400トンで、前年の150%、平年の122%となり、前年、平年を上回った。漁獲の主体は豆サバ(0~1歳魚)で、9月以降県東部を中心に平年を大きく上回る漁獲があり好調に推移した。

③マイワシ

秋季に県東部において中羽イワシを主体にまとまった漁獲があり、2005年の総漁獲量は1,351トンで、前年、平年の約3倍となり、近年では好調に推移した。しかし、マイワシ資源は全国的に低水準状態にあり、資源の回復は当分見込めそうにない状況にある。

④カタクチイワシ

2005年の漁獲量は6,555トンで、前年の120%、平年の48%であった。カタクチイワシの漁獲量は1995年から2000年までは、冬期を中心として3万トン台の高水準を維持していたが、2001年以降減少傾向にある。2005年は3月に県東部で産卵群がまとまって漁獲されたが、その後は低調に推移した。

⑤ウルメイワシ

2005年の漁獲量は6,325トンで、前年の101%、平年の170%となった。漁獲の大半は県東部で漁獲されたもので、県西部での漁獲は極僅かであった。

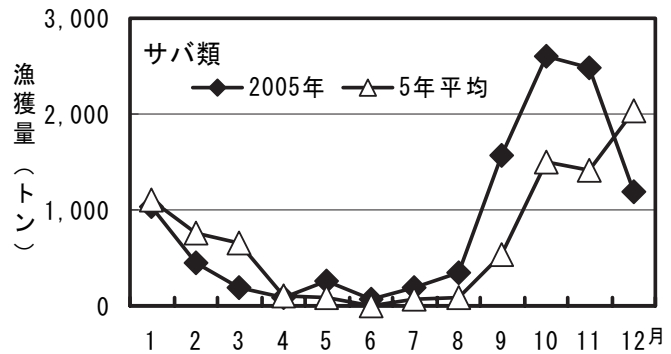


図4 中型まき網によるサバ類の漁獲量

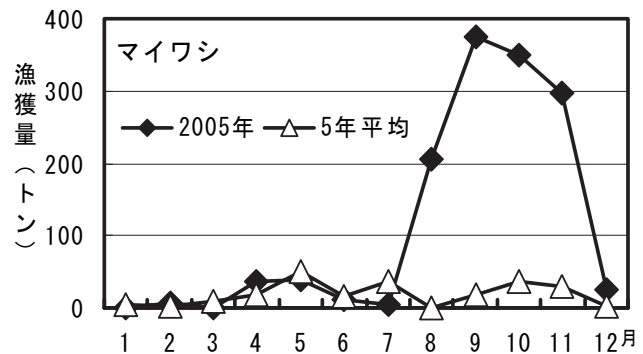


図5 中型まき網によるマイワシの漁獲量

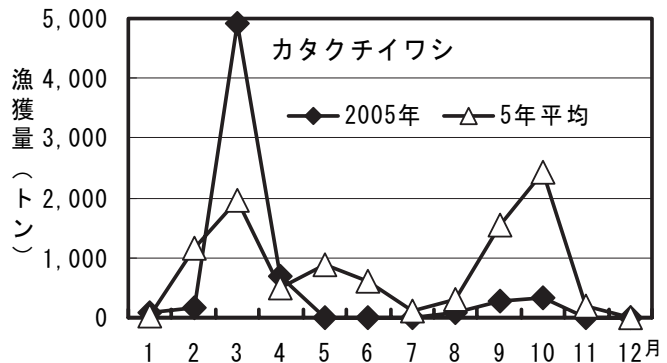


図6 中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量

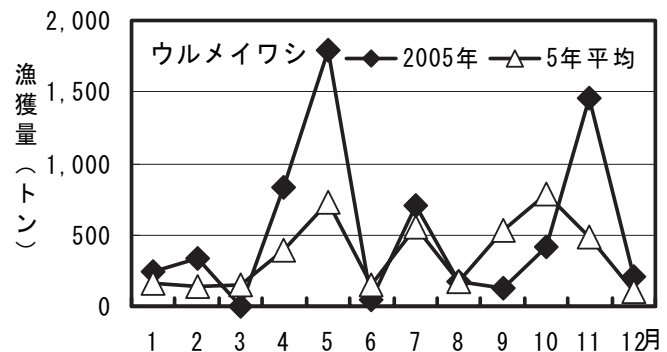


図7 中型まき網によるウルメイワシの漁獲量

## 2. いか釣り漁業

ここでは、いか釣り漁業(5t未満船)、小型いか釣り漁業(5t以上30t未満船)、中型いか釣り漁業(30t以上)によって浜田港に水揚げされたイカ類の漁獲動向をとりまとめた。

### (1) スルメイカ

浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲動向および水揚げ金額の動向を図8と9に示す。漁獲量は、2002年(2,178トン)以降2年連続して減少していたが、2005年は1,216トンで、前年の160%、平年(過去5年間)の91%と3年振りの増加となった。水揚げ金額も5億1千万円で、前年の154%、平年の109%と増加した。

図10に月別の漁獲動向を示す。1月は漁場が竹島の南方や見島～対馬の間の海域に形成されたため漁獲量は少なかったものの、2、3月には見島沖から島根県沖合海域に漁場が形成されたことから好漁が続き、過去5ヶ年間で最高の漁獲量となった。

### (2) ケンサキイカ

浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲動向および水揚げ金額の動向を図11と12に示す。

2005年のケンサキイカの漁獲量は、301トンで、前年の56%、平年の51%と低調に推移し、2003年以降2年連続して減少した。漁獲量の減少に加えて、魚体が小型のものが多かったことから単価(763円/kg)も下がり、水揚げ金額は2億3千万円で、前年の41%、平年の42%と低迷し、近年

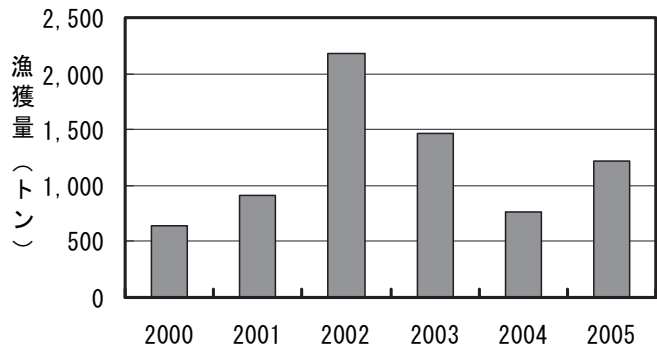


図8 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲量の動向

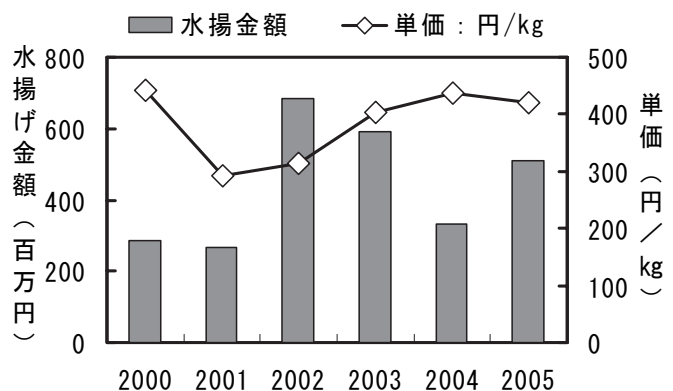


図9 浜田港に水揚げされたスルメイカの漁獲金額と単価の動向

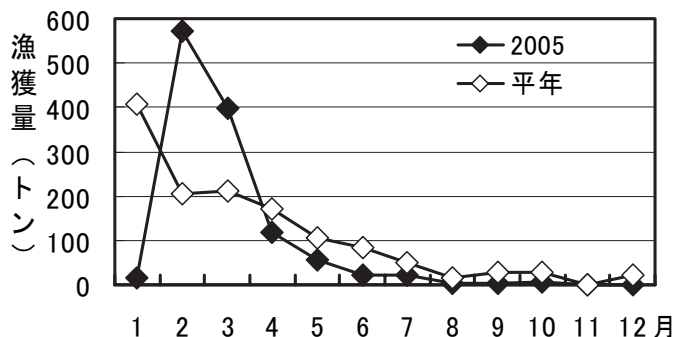


図10 浜田港に水揚げされたスルメイカの月別漁獲動向

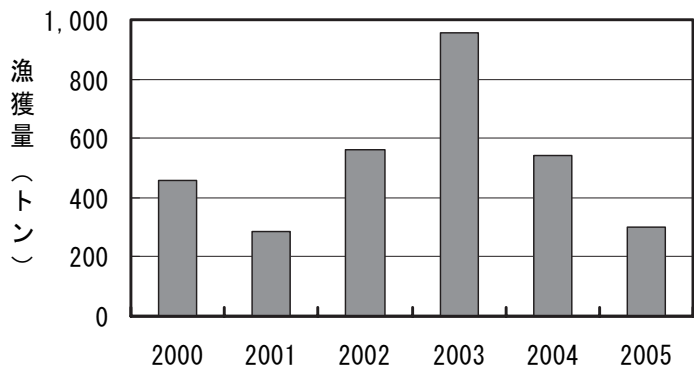


図11 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲量動向

で最も低い値となった。

図13に月別の漁獲動向を示す。7月は沿岸域を主体に平年並みの漁獲があったが、例年主漁期となる夏～秋季の漁況は平年を大きく下回って推移した。

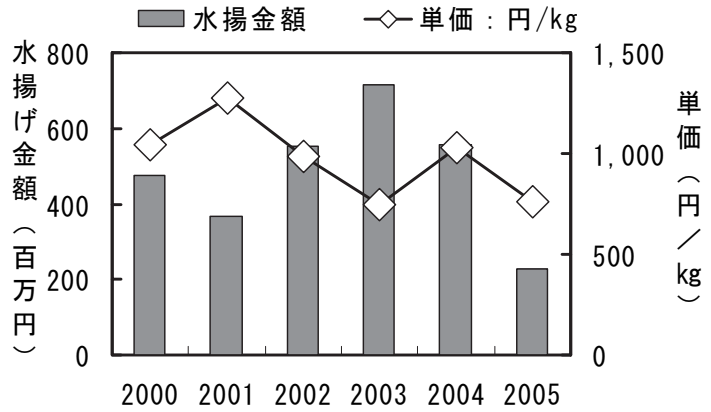


図12 浜田港に水揚げされたケンサキイカの漁獲金額と単価の動向

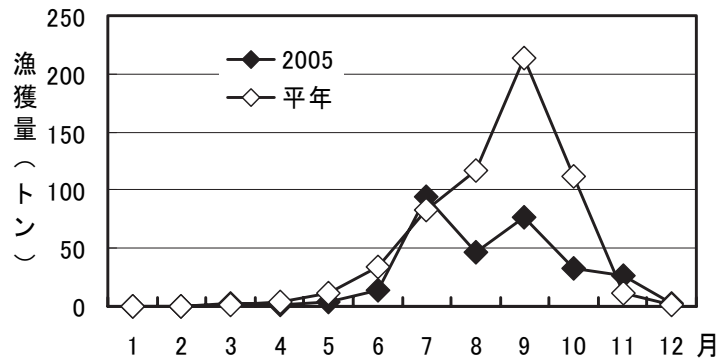


図13 浜田港に水揚げされたケンサキイカの月別漁獲動向

### 3. 沖合底びき網漁業

本漁業は東経128度以东の日本海南西海域を漁場としており、島根県では9ヶ統が操業している。本報告では、このうち浜田港を基地として操業を行っている6ヶ統を対象として解析を行った。操業期間は8月16日から翌年5月31日までで、6月1日から8月15日までは禁漁期間である。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を8月16日から翌年5月31日までとした。

#### (1) 全体の漁獲動向

図14に1981年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業(以下、浜田沖底という)における総漁獲量と1統当たり漁獲量(以下、CPUE という)の経年変化を示す。

総漁獲量は、操業統数の減少により急激に減少したが、1993年以降3,000トン台で安定して推移している。一方、CPUE は日韓新漁業協定が発効された1998年以降急増し、近年は500トン台で推移している。

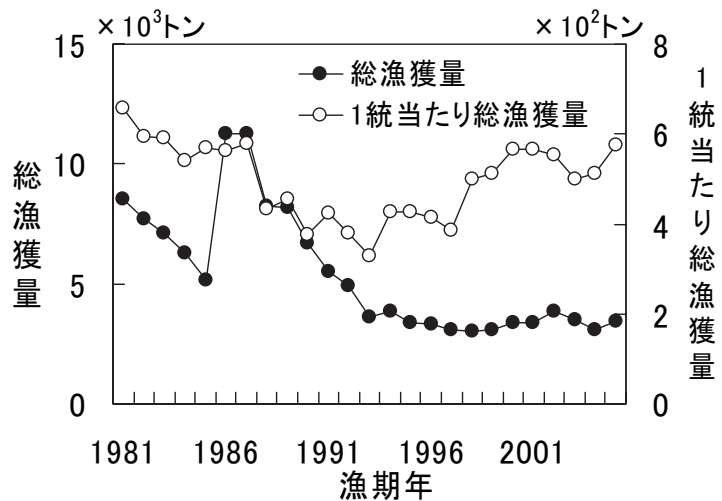


図14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と1統当たり総漁獲量の経年変化

2005年の浜田沖底の総漁獲量は前漁期を14%上回る3,460トン、CPUEは576トン/統であった。また、総水揚げ金額は16億2千万円、1統当たり水揚げ金額は2億7,075万円で、前漁期を4%下回った。

今漁期は、漁期当初から大型クラゲが大量に来遊し、操業に支障が生じたが、魚価の高い年末の漁獲が好調であったことから水揚げ金額の落ち込みもほとんど無かった。

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図15にカレイ類のCPUEの経年変化を示す。

ムシガレイは長期的に減少傾向にあったが1993年を底に、1990年代後半は増加に転じた。しかし、ここ数年はやや減少傾向にある。2005年の漁獲量は466トン、CPUEは78トン/統で、前年を17%、平年(1995年～2004年平均)を29%上回った。今漁期は小型魚が多く漁獲され、2001年以来の卓越年級群の出現が期待される。

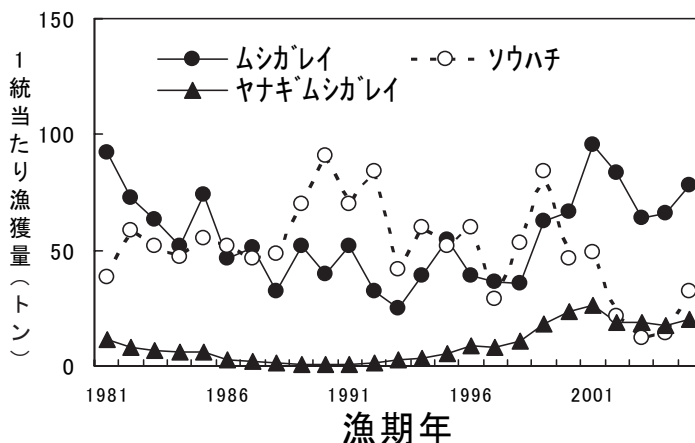


図15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるカレイ類の1統当たり漁獲量の経年変化

ソウハチは1990年以降、大きな変動を示しながら減少傾向にある。特に1999年以降は急減し、3ヶ年で1/4まで減少した。2005年の漁獲量は193トンで、2002年以来の100トンを超える水揚げとなった。今漁期は島根沖冷水の張り出しが例年よりも強く、冷水性の本種の漁場が比較的沿岸部に形成されたことが原因と思われる。CPUEは32トン/統で、前年を130%上回ったものの、平年の76%に留まった。

ヤナギムシガレイは1991年以降増加傾向にあったが、2001年以降は停滞気味である。2005年の漁獲量は119トン、CPUEは20トン/統で、前年を14%上回り、平年を27%上回る水揚げがあった。カレイ類は概ね好調で、大型クラゲの大量来遊による漁獲量の落ち込みを下支えた。

②イカ類

図16にイカ類のCPUEの経年変化を示す。

ケンサキイカは周期的に大きな変動を示し、近年は横這い傾向にある。2005年の漁獲量は121トン、CPUEは20トン/統と前年の33%、平年の37%に留まり、大きく減少した。

一方、ヤリイカは1990年以降急激に減少し、近年は低位横這い傾向にある。2005年の漁獲量

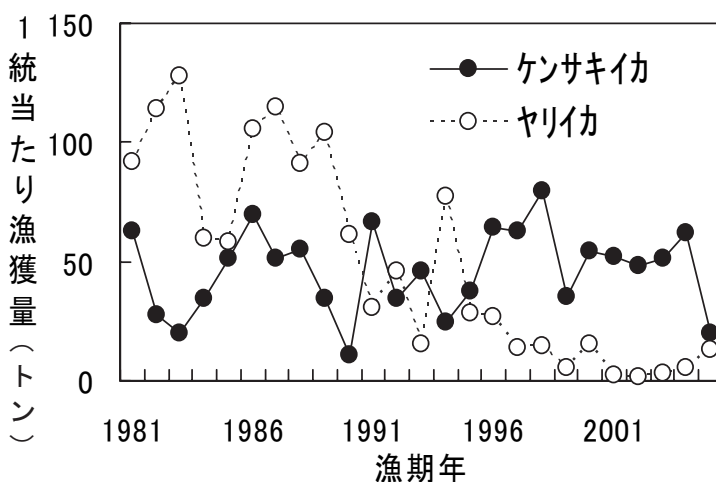


図16 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の1統当たり漁獲量の経年変化

は80トン、CPUEは13トン/統であった。

③その他

図17に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種のCPUEの経年変化を示す。

アナゴは1995年以降、漁獲量の年変動が大きくなり、最近では減少傾向にある。2005年の漁獲量は206トン、CPUEは34トン/統で、前年を3%上回ったものの、平年を4%下回った。

アンコウは1990年代に入り増加傾向にある。2005年の漁獲量は271トン、CPUEは45トン/統で、前年を12%、平年を77%上回り、1981年以降最高の水揚げとなった。

キダイは1990年代に入って増加傾向を示していたが、1998年以降年変動が大きくなり、好不漁を繰り返している。2005年の漁獲量は90トン、CPUEは15トン/統で、前年の31%、平年の55%の水揚げに留まった。

ニギスは1998年をピークに急激な減少傾向にあったが2005年の漁獲量は286トン、CPUEは48トン/統で、前年を143%、平年を87%上回った。

アカムツは1999年、2000年と急増したものの2001年以降横這い傾向にある。2005年は漁期後半にまとまって漁獲され、漁獲量は94トン、CPUEは16トン/統で、前年を24%上回る水揚げがあったが、小型魚が中心であったため水揚げ金額には反映されず、漁獲金額ベースでは前年を31%下回った。

4. 小型底びき網漁業第1種

本漁業は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深80~180mの海域を漁場とし、現在58隻が操業を行っている。操業期間は9月1日から翌年5月31日までである(6月1日から8月31日までは禁漁期間)。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした。なお、ここでは温泉津町漁協所属船を除く57隻分の集計値を用いた。また、1隻当たり漁獲量は

1 統 当 た り 漁 獲 量 ( ト ン )

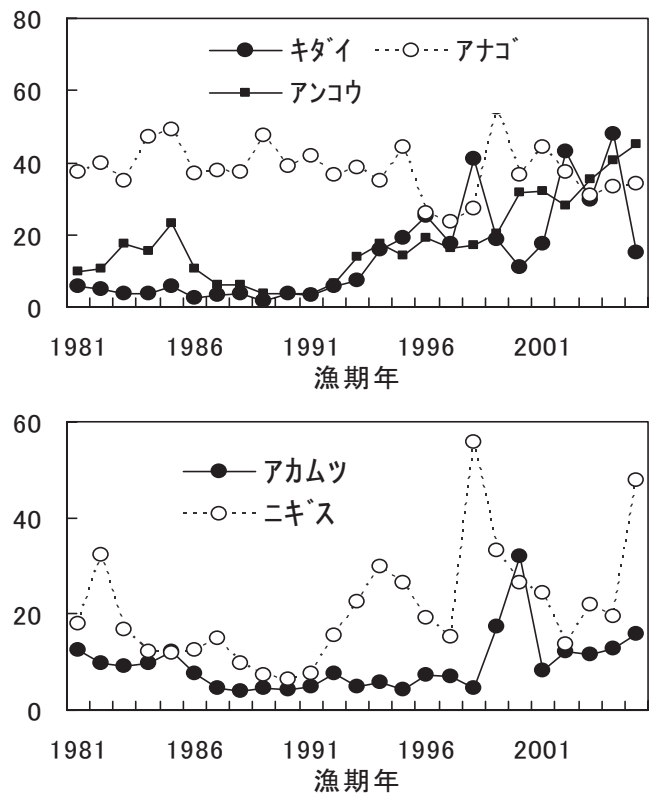


図17 浜田港と基地とする沖合底びき網漁業における主要種の1統当たり漁獲量の経年変化

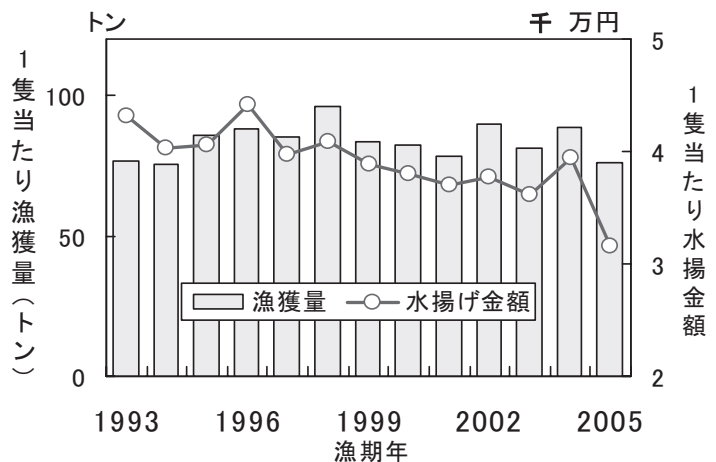


図18 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚げ金額の経年変化



途中休漁した2隻を除いて算出した。

(1) 全体の漁獲動向

図18に1993年以降の小型底びき網漁業(以下、小底という)における1隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化を示す。

2005年の小底全体の総漁獲量は4,233トン、総水揚金額は17億5,435万円であった。一方、1隻当たり漁獲量は76トン/隻、水揚金額は3,156万円/隻で、いずれも平年(過去10年平均値 85.8トン/隻、3,924万円/隻)を大きく下回った。今漁期は漁期当初からエチゼンクラゲが大量に来遊し、操業に支障が生じたことに加えて、魚価の高い年末に時化が続き、出漁日数が減少したことが水揚げに大きく影響した。

(2) 主要魚種の漁獲動向

①カレイ類

図19にカレイ類の1隻当たり漁獲量(以下、CPUEという)の経年変化を示す。

ムシガレイのCPUEは5トン/隻前後で比較的安定して推移している。2005年の漁獲量は284トン、CPUEは平年(過去10年平均)を11%下回る5.2トン/隻であった。

ソウハチの漁獲量は1998年をピークにその後急減した。2005年の漁獲量は606トン、CPUEは11トン/隻で平年を32%下回った。

メイタガレイの漁獲量は47トン、CPUEは0.8トン/隻で、ほぼ前年並みであったが、平年の56%の水揚げに留まった。

またヤナギムシガレイ(1.9トン/隻)は平年比17%増であった。

②イカ類

図20にイカ類のCPUEの経年変化を示す。イカ類は全般的に低調な漁獲であった。

ケンサキイカのCPUEは3トン/隻前後で推移していたが、2003年に急増して4トン/隻を越えた。しかし、2004年には大きく減少し、2005年も前漁期に引き続き低調であった。漁獲量は149トン、CPUEは2.7トン/隻で、平年の85%の漁獲に留まった。

一方、ヤリイカのCPUEは2001年までは1年おきに好不漁を繰り返していた。しかし、2002年以降は低水準に落ち込んだままで、2005年の漁獲量は52トン、CPUEは0.9トン/隻で前年の58%、平年の49%の漁獲に留まった。

スルメイカの2005年の漁獲量は170トン、CPUEは3.1トン/隻で、前年を50%、平年を16%

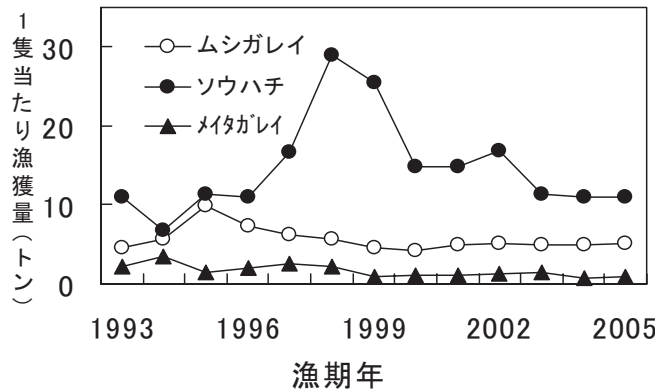


図19 小型底びき網漁業におけるカレイ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

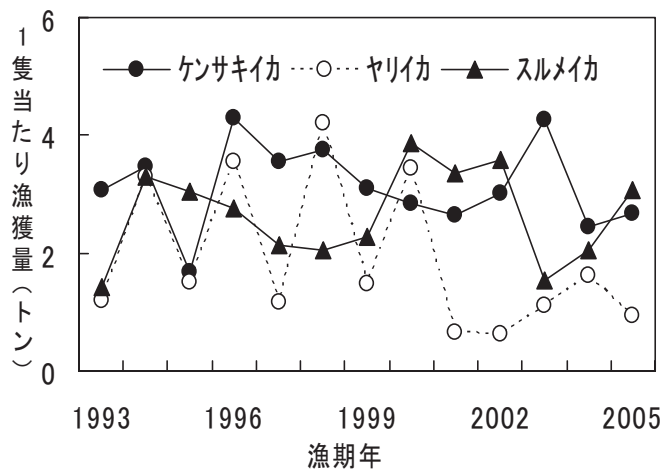


図20 小型底びき網漁業におけるイカ類の1隻当たり漁獲量の経年変化

上回った。

③その他

図21に小底で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種のCPUEの経年変化を示す。

近年増加傾向にあるアンコウは334トンの水揚げがあった。CPUEは6トン/隻で、平年を10%上回った。

ニギスのCPUEは1999年に大きく落ち込んだ後2002年から再び10トン/隻前後まで増加したが、その後は停滞しており2005年の漁獲量は602トン、CPUEは10.9トン/隻であった。

アナゴ類のCPUEは年変動は少ないが、長期的には減少傾向にあり、2005年の漁獲量は120トン、CPUEは2.2トン/隻で、平年を27%下回った。

アカムツのCPUEは、沖底と同じく2000年に卓越年級により一時的に増加したがその後は再び減少し、2トン/隻前後で推移している。漁獲量は96トン、CPUEは1.7トン/隻で前年の64%の漁獲に留まったが、平年を4%上回った。

キダイのCPUEも沖底同じく大きな年変動を示し、2000年前後はやや増加傾向にあったが、2005年は大きく減少し、漁獲量は241トン、CPUEは4.1トン/隻となった。

ハタハタの漁獲量は128トン、CPUEは2.3トン/隻であった。好調だった前年の45%に留まった。

5. ばいかご漁業

石見、出雲海域におけるばいかご漁業は小型底びき網漁業(第1種)休漁中の6月～8月にかけて行われており、平成17年の稼働隻数は6隻(石見部5隻、出雲部1隻)であった。解析に用いた資料は、ばいかご漁業漁獲成績報告書と漁獲統計資料(大田市漁協、和江漁協、仁摩町漁協、平田市漁協)各漁業者に記入依頼を行なっている操業野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、エッチュウバイの価格動向および漁場利用について検討を行なった。また、資源生態調査として、大田市漁協、和江漁協ならびに仁摩町漁協に水揚げされる漁獲物の殻高を銘柄別に測定し、この結果と銘柄別漁獲箱数か

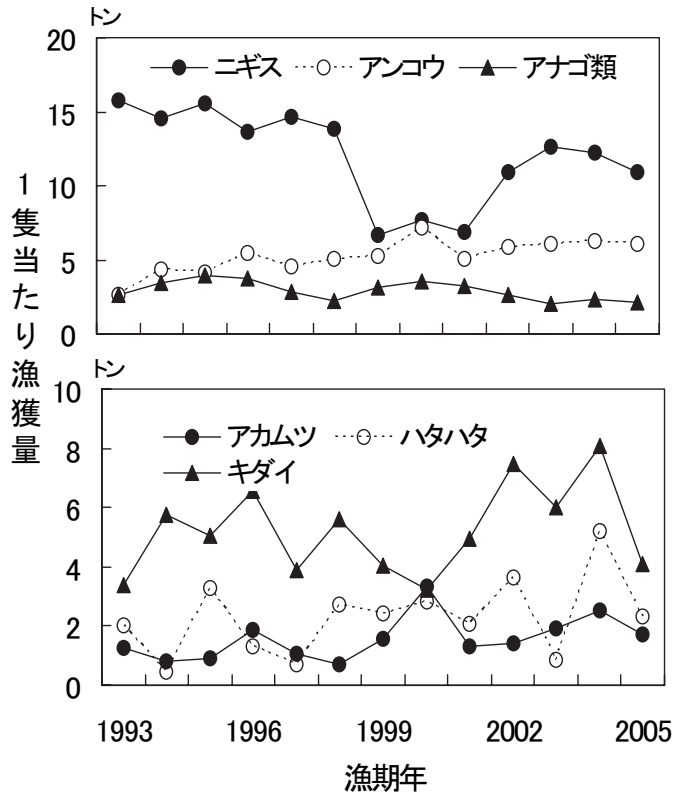


図21 小型底びき網漁業におけるその他主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

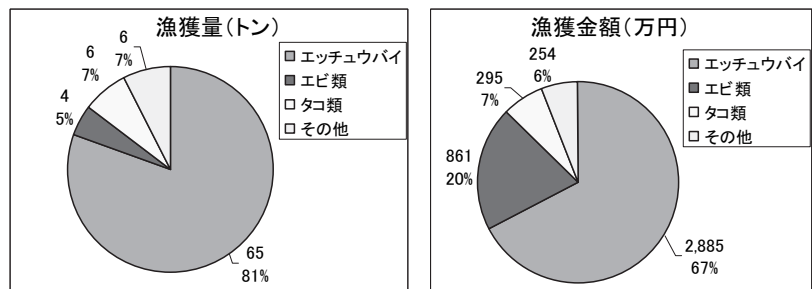


図22 平成17年度ばいかご漁業(石見・出雲)の漁獲量・漁獲金額

各漁業者に記入依頼を行なっている操業野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、エッチュウバイの価格動向および漁場利用について検討を行なった。また、資源生態調査として、大田市漁協、和江漁協ならびに仁摩町漁協に水揚げされる漁獲物の殻高を銘柄別に測定し、この結果と銘柄別漁獲箱数か



らエッチュウバイの殻高組成を推定した。

(1) 漁獲動向(図22~24)

エッチュウバイの漁獲量は平成9年以降減少を続けているが、平成17年度は前年度よりさらに大きく減少し過去最低となった。平成17年のばいかご漁業による総漁獲量は81トン(前年比77%)、総水揚げ金額4,295万円(前年比79%)であった。うちエッチュウバイは65.1トン(前年比81%)、2,885万円(前年比85%)、稼働隻数6隻、総航海日数188日(前年196日)であった。

漁獲物の組成は前年度とほぼ同じで漁獲の中心は殻高70~100mmの中・大型貝であった(図28)。

(2) 漁場(図25)

漁場の利用状況は前年とほぼ同じ状況であり、N35°35'~45'、E132°10'~30'付近の漁場への集中化が見られた。

(3) 魚価の推移(図26、27)

エッチュウバイの1kg当たり平均価格は石見部で434円(前年比+16円)、平田市漁協で486円(前年比+14円)であり、前年度よりやや上昇したものの、依然低い水準で推移している。図26には、周年ばいかご漁業が行われている隠岐島のおき西郷漁協所属のばいかご漁船の平均単価も示している。西郷では一旦低下した単価が平成14年以降上昇に転じ、平成15年以降は県西部、平田市を逆転している。

(4) 資源状態(図24)

CPUE(1航海あたり漁獲量)

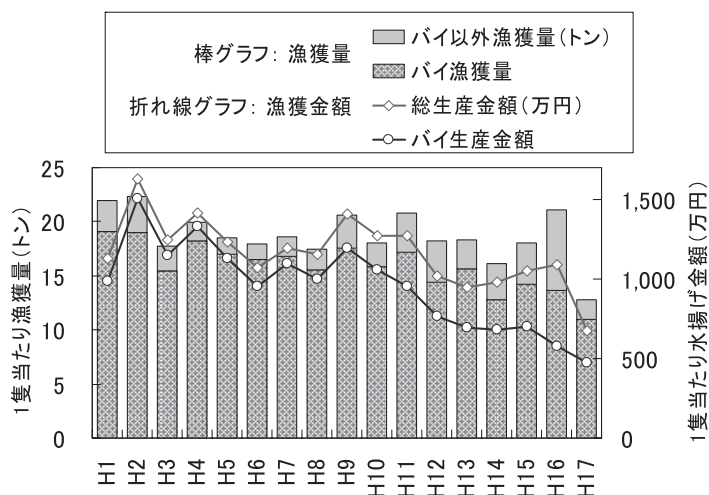


図23 ばいかご漁業における1隻当たり漁獲量・水揚げ金額の推移

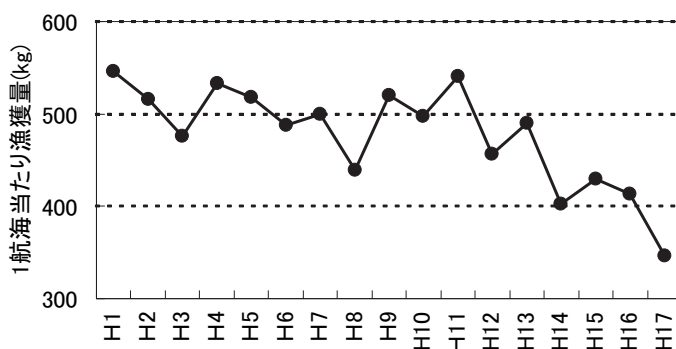


図24 エッチュウバイのCPUE(漁獲努力量あたり漁獲量)の推移

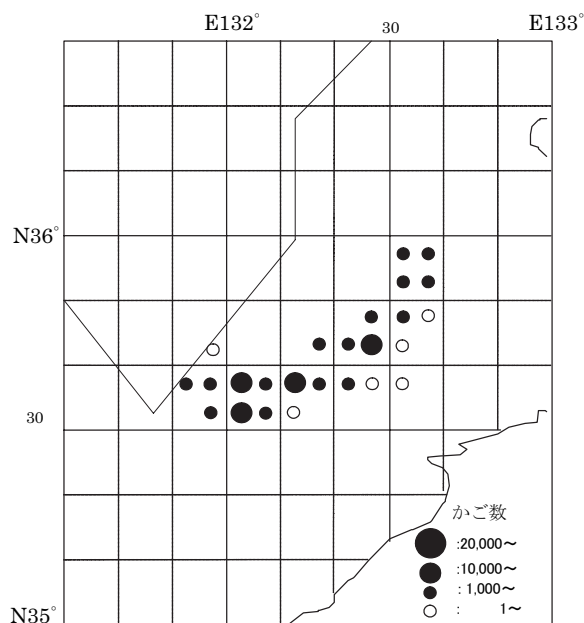


図25 平成17年度ばいかご漁業の漁場

は平成12年以前は500kg/航海程度であったが、平成12年以降は低下を続けており、平成17年漁期は346kg/航海にまで低下した。平成17年度は漁期前半に潮流が速く漁獲効率が悪かったことも要因の1つと考えられるが、本漁業の漁場におけるエッチュウバイの資源状態はかなり悪化しているものと考えられる。

(5) その他

これまでに浜田水産事務所が主体となって漁獲物の高付加価値化のための活動を実施してきた。例えば海水冷却装置の導入により漁獲物の高鮮度化を図っており、冷海水を使用して持ち帰ったエッチュウバイは出荷後の活力が高いことも分かった。これらの取り組みが直ちに価格の向上に反映されてはいないものの、漁獲量が減少している現状では、価格の向上は最重要課題であり、今後も付加価値向上の取り組みを進めてゆくべきである。

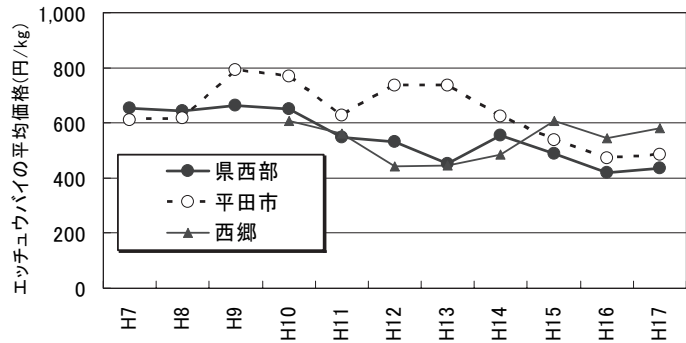


図26 エッチュウバイの平均単価の推移

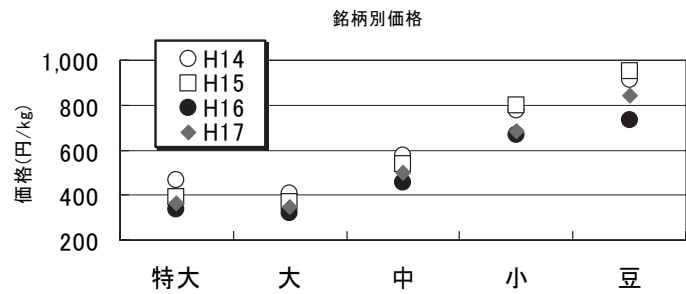


図27 エッチュウバイの銘柄別価格

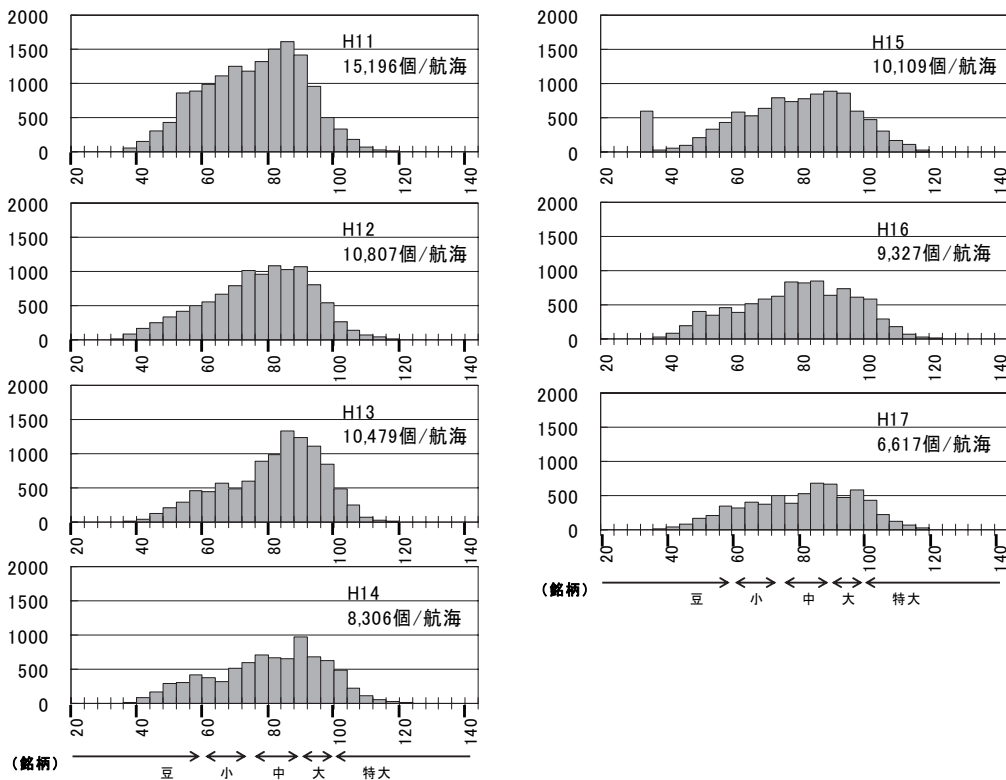


図28 ばいご漁業におけるエッチュウバイの殻高組成の推移。(個数は1航海当たり)